

島根の子どもの資質・能力を育む授業づくり
～单元構想シートの効果的な活用に向けて～（3年次）

島根県教育センター
企画・研修スタッフ 共同研究

深田剛生 秋月広美 石川大介 今岡 俊 大森俊也 柏井陽子
河野雅子 須山健太 妹尾俊介 仙田浩志 園山裕之 大門 透
高橋隆子 丹羽 隆 松本洋和 三浦雄一郎 山崎敦史

目 次

【要旨】	1
1 研究の背景と目的	1
2 令和6年度（昨年度）研究の概要	2
(1) 指導と評価の一体化についての整理	2
① 先行研究を踏まえた評価の視点の整理	2
② 単元構想のポイントの整理	2
(2) 単元構想シートの作成と改善	2
① 内容の検討	2
② シートの改善	2
3 令和7年度研究の目的と計画	2
(1) 目的	2
(2) 計画	2
① スタッフ内の共通理解	2
② 教科ワーキンググループの編成	3
③ 授業実践協力者の選定	3
④ アンケート内容の検討	3
⑤ 単元構想シートの改善	3
⑥ 単元構想シートの県内各校へ向けた周知	3
4 研究の内容	3
(1) 各教科における単元構想シートの実際	3
① 単元を構想する上で大切にしたいポイント	3
(2) アンケートについて	8
① 調査のねらい	8
② 調査の内容と方法	8
③ アンケート結果より	9
5 研究の成果と課題	15
(1) 成果	15
① 子どもの見取りを中心に据えた単元構想シートの在り方の明確化	15
② 教科の特質に応じた単元構想シートの開発	15
③ 授業者の必要感に応じた柔軟な活用を可能にする設計	15
(2) 課題	16
① 長期的な活用による効果の検証	16
② 校内研究における活用方法の具体化	16
③ ICT環境の変化への対応	16
6 おわりに	16
【引用文献】	17
【参考文献】	17

島根の子どもの資質・能力を育む授業づくり ～単元構想シートの効果的な活用に向けて～（3年次）

島根県教育センター 企画・研修スタッフ 共同研究
深田剛生 秋月広美 石川大介 今岡 俊 大森俊也 柏井陽子
河野雅子 須山健太 妹尾俊介 仙田浩志 園山裕之 大門 透
高橋隆子 丹羽 隆 松本洋和 三浦雄一郎 山崎敦史

【 要 旨 】

本研究は、子ども一人一人の資質・能力を育むため、指導と評価の一体化を図った単元構想の在り方を整理し、授業者に単元を構想する際の指針を提案することを目的とした。

3年次は、前年度までの成果と課題を踏まえ、5教科における単元構想シートの在り方を検討した。授業実践協力校からの所感をもとに、教科の特質に応じて単元構想で重視すべき視点を焦点化し、内容の改善を繰り返した。その結果、教師による適切な子どもの見取りを中心に据えた単元構想シートに改善することができた。

今後、県内すべての小・中・義務教育学校、高等学校及び特別支援学校へ周知することで、単元構想シート「子どもの思考過程を大切にするための単元構想シート」が授業者の必要感や子どもの実態等に応じて効果的に活用されることを期待している。

【キーワード：指導と評価の一体化 子どもの実態 見取り】

1 研究の背景と目的

令和5年度全国学力・学習状況調査において、島根県内の子どもの正答率は中学校国語を除いて全国平均を下回り、多くの教科で高正答率者が全国と比較して少ない傾向が明らかになった。

また、「授業に関して困っていること」について県内の一部学校で聞き取りを行ったところ、99件中23件が「子どもの学力差」に関するものであった。授業者は「子どもの学力差」に対して個に応じた授業を展開したいが、指導と評価の一体化に向けて授業改善を図る際に、焦点化する視点を明確にすることに課題を抱えていると予想された。

これらを踏まえ、子ども一人一人の資質・能力を育むため、指導と評価の一体化を図った単元構想の在り方を整理し、授業者に単元を構想する際の指針を提案することを目的として本研究を設定した。

なお、これまで2か年の研究の目的は以下のとおりである。

＜令和5年度（1年次）の目的＞

「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想する上で大切にしたいポイントを見いだすとともに、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を明確にする。

＜令和6年度（2年次）の目的＞

1 年次の成果と課題を踏まえ、指導と評価の在り方を整理するとともに、単元構想を視覚化できる資料の基盤を作成する。

2 令和 6 年度（昨年度）研究の概要

（1）指導と評価の一体化についての整理

① 先行研究を踏まえた評価の視点の整理

「評価」を「見取り」「評価」「評定」の 3 つに分類・整理している文献をスタッフ内で共有し、特に「見取り」の重要性に着目した。

② 単元構想のポイントの整理

スタッフ内で「指導と評価の一体化が図られている授業」をテーマにワークショップを実施した。連想するキーワードをイメージマップで広げ、ポイントを「一人一人の適切な見取り」「目標の明確化・具体化」という 2 点に焦点化した。

（2）単元構想シートの作成と改善

① 内容の検討

（1）②で整理した事柄を踏まえ内容を検討した。検討の結果、初めから多教科等に活用範囲を広げるより、まず教科を限定することでより実践的なシートになると判断し、研究の対象を算数・数学科と理科の 2 教科に絞った。

② 単元構想シートの改善

①について開発した単元構想シートをより実践的な形に近づけるため、授業実践者の協力を得ながら内容を再検討した。

3 令和 7 年度研究の目的と計画

（1）目的

子どもの資質・能力の育成を図るには、授業において授業者が子ども一人一人の実態を的確に捉えること、つまり適切に子どもを見取る力が求められる。同時に、授業における目標の明確化と指導の具体化を基盤に据えた授業構想や単元構想が欠かせない。一方で、それらの必要性を感じながらも、画一的な授業展開からの脱却に課題を感じる教師も多い。

そこで、子ども一人一人の資質・能力を育むための授業を指導と評価の一体化の視点で整理し、授業者が授業を構想する際のポイントを焦点化するとともに、そのポイントを大切にしたい授業づくりの単元構想シートを提案することを目的とする。提案にあたっては、令和 6 年度に開発した単元構想シートにおいて活用できる教科を広げながら、単元構想シートの効果的な活用に向け県内の教員へ広く周知を図り、「一人一人の適切な見取り」と「目標の明確化・具体化」を意識した授業づくりの大切さを発信していく。

（2）計画

① スタッフ内の共通理解

昨年度までの 2 か年の研究を踏まえ、これまで理数教科に限っていた単元構想シートの活用の幅を 5 教科に広げ、指導と評価の一体化の視点から、授業者が「一人一人の適切な見取り」と「目標の明確化・具体化」を意識できる単元構想シートを開発していくという研究の方向性について共通理解を図る。

② 教科ワーキンググループの編成

作成をめざす5教科（国語科、社会科、算数・数学科、理科、外国語科）について、それぞれを担当するグループ編成を行う。担当する指導主事は、日頃から能力開発研修等の専門分野で研修に関わっている者を充てる。また、実践協力者や実践校からの感想や意見をその後の単元構想シートの改善に効果的につなげるため、項目検討および結果分析を行うワーキンググループも同時に立ち上げる。

③ 授業実践協力者の選定

6年目研修及び中堅教諭等資質向上研修の受講者を主体として、単元構想シートを用いた授業実践の協力者を選び、実践協力校として教育センターから所属長へ依頼する。その際、夏季休業中までに1回、12月末までに1回、合わせて2回の実践をしていただくことを伝える。また、それぞれの実践について単元構想シートの改善を目的とするアンケートの回答を依頼する。

④ アンケート内容の検討

単元構想シートを用いて授業実践をした教員の率直な感想を拾い上げながら、その有効性や今後の改善の方向性について検討する材料となるアンケートの質問項目の在り方を検討する。

⑤ 単元構想シートの改善

1回目の授業実践で提示した単元構想シートと実践協力者及び実践協力校から得たアンケートの回答内容についてスタッフで共有するとともに、今後の改善に向けて大切にしたいポイントを整理することを目的とした全体会を設ける。それを受け、各教科ワーキンググループで2回目の授業実践に向けた単元構想シートの改善を図る。

また1回目の授業実践をもとに、2回目の授業実践に向けて単元構想シートの改善を図る。同様の目的で全体会を設けるとともに、各教科における単元構想シートが本研究でめざすシートに近づいていることを確認する。

⑥ 単元構想シートの県内各校へ向けた周知

県内すべての小・中・義務教育学校、高等学校及び特別支援学校に向けて単元構想シートの周知を図る。なお、周知にあたっては島根県教育センターのウェブページにExcelデータのリンク先を示すことで、素早く手軽に活用していただけるようにする。

4 研究の内容

（1）各教科における単元構想シートの実際

① 単元を構想する上で大切にしたいポイント

ア 国語科

国語科の単元構想では、育成すべき資質・能力を明確にした上で、子ども一人一人の学びを見取り、支援につなげることを重視した。単元全体を見通して子どもの思考過程を予め想定し、授業の中で見取ることで改善や次時への接続に生かすことを考えた。授業者が教室内で生まれる多様な反応を的確に捉え、指導と評価の一体化を実現するために、以下の視点からシートを構成した。

（ア） 一貫した指導を支える「単元構想の核」とそれに基づく「おおまかな構想」

単元構想をする初期段階において、授業の軸を確立するための項目を「単元構想の核」として定義した。そしてそれを基に「おおまかな構想」を考えることで単元を俯瞰して見やすくなり、授業のイメージをもちやすくなるのではないかと考えた。

A 資質・能力の設定とゴールの言語化

学習指導要領に基づき、本単元で身に付けさせたい力を明確にする。単元の終末で子どもたちがどのような姿を見せ、どのような言葉を発してほしいかを具体的に言語化し、見取りの基準（ゴール）を明確にする。

B 実態把握に基づく問いと言語活動の設定

現在の姿（既習の定着度や関心）を捉えた上で、子どもが自ら解決したくなる「単元を貫く問い」と最適な言語活動を決める。

(イ) 「見取り」を指導に直結させる各時の構想

毎時間の授業においては、教師の「見取り」を形骸化させず、その場での適切な指導（即時評価と支援）につなげることを重視した。

A 子どもの反応へのシミュレーション（A・B・Cの想定）

教師の問いに対し、子どもたちがどのような思考過程をたどるかを、目標到達度の視点からA（十分満足）、B（おおむね満足）、C（支援が必要）の3つの様相で予測する。予め子どもの答えを想定しておくことで、授業中の子どもの発言や記述に適切に反応できる。また、予測することで育成したい資質・能力を教材に落とし込んだり、子どもの思考過程をより詳しく想像したりすることが可能になる。

B 指導の手立てを事前に準備

想定したそれぞれの反応に対し、支援や手立てをセットでイメージしておくことで、授業中の子どもの反応を「ただ見るだけ」に終わらせず、その場での的確な助言や、支援など指導と評価の一体化を図る。

(ウ) 次時への接続と作成負担の軽減

授業後は、事前の想定と実際の反応を照らし合わせ、子どもの実態の変容や授業者の成果と改善点を簡潔に書き留める。そして、次時以降の授業を確認したり見直したりして、必要ならば修正や加筆等を柔軟に行っていく。また、この振り返りの蓄積が単元終了後の実際の子どもの姿を理解する際にも役立つと考えた。授業者にとって使いやすく、子どもと向き合う時間を最大限に生かしながら資質・能力の育成の助けになることを期待している。

イ 社会科

社会科の単元構想においては、学習指導要領に示された資質・能力を育むために、子どもが社会的な見方・考え方を働かせて学習問題を探究できるように構想することが大切である。そのためには単元において子どもに獲得させたい概念的知識を明確にした上で、子どもがもつ学習問題や各時間の問いを想定することが必要になる。その構想の上に立って、各時間の子どもの学びを見取り、柔軟に問いを修正していくことも大切である。それを踏まえた上で、以下の視点から単元構想シートを作成した。

(ア) 獲得させたい概念的知識と問いを中心とした単元の全体構想

島根県内の社会科学習では「知識と問いの構造図」を作成した上で学習に入る実践例が見られる。それにより授業者が見通しを持って授業に臨める良さがある。そこで構造図の中のエッセンスを取り込んだ上で、問いを中心とした単元の全体像をシートの最初に設けた。

その際に、「(社会的事象との) 出合いの問い」「学習問題に迫る問い」「学習問題(単元を貫く問い)」「学習問題を追究・解決する、事象を調べるための具体の問い」「学習問題を振り返り、まとめに向かう問い」「実社会につなげる問い」等、授業者が問いを考えやすいよう細分化して示した。

また、「(学習問題に対する) 子どもの予想」「(学習問題に対する) 子どもの学習のまとめ(例)」「(実社会につなげる問いに対する) 子どもの表現(例)」等の欄を設けることで、子どもの予想、獲得する知識、選択・判断する内容等を明確にして授業に臨めるようにした。

さらに、「子どもに出合わせる社会的事象」「学習問題に迫る資料」「予想の手がかりとなる資料」「(各時間の) 調べる方法や資料」を記入する欄を設けることで、子どもが何を根拠に考えるのか、どのような学習活動が考えられるのかの見通しを持てるようにした。

(イ) 子どもと問いをつくる授業

単元構想通りに単元を進めることを優先してしまうと、子どもが実際に持った気付きや疑問を置き去りにして進めることにつながってしまう。そこで問いは子どもと共につくることを意識化し、子どもの学びに合わせて柔軟に次時からの問いを変えながら単元を進めることができるように、毎時間のシートに「子どもがもつであろう問い」の欄の下に、「子どもがもった新たな問い」の欄を設けた。

(ウ) 指導と評価の一体化

毎時間の授業の教師の「見取り」と評価、支援が的確にできるように、目標到達度別の子どもの姿を想定する欄を設けた。

実践者からは、本シートの活用によって「問いを見直す意識が高まった」という声をもらった。また、小学校社会科教育講座での単元構想演習で本シートを活用した受講者全員から「使いやすい」「今後も活用したい」との感想をもらった。

ウ 算数・数学科

算数・数学科における単元構想では、具体的な言動でめざす子どもの姿を設定し子どもの思考の流れを予測して単元を構想することを大切にし、日常的に使えるシートをめざした。

(ア) めざす子どもの姿を具体的な言動で設定し、子どもの思考の流れを予測した単元構想

概ね次のような流れで単元を構想することを想定している。

A 単元が始まる前の子どもの実態を把握する。

- B 単元が終わるときのめざす子どもの姿を具体的な子どもの言動で設定する。
- C 子どもの思考を予測し、めざす子どもの姿から単元をさかのぼりながら授業を構想し、大まかな単元の流れを考える。
- D 子どもの問いとして、学びの本質を明確にする。

このようにして単元を構想することで、単元をとおして大切にしたい学びの本質や単元のメリハリを考えることができる。さらに、すべての子どもが、「あれ?」「なぜ?」「そうか!」「できた!」「わかった!」「やってみたい!」という思いをもつ場面を単元内に適切に設定することができるようになる。

(イ) 日常的に使えるシート

算数科では、「本質的な問い」において、単元をとおして学ぶ算数の本質を問いの形で明確にすることとした。この「本質的な問い」を日常的に確認することで、学びの本質を意識した子どもへの問い返しや授業の方向修正等について自信をもって行うことができる。

数学科では、1時間ごとのめざす子どもの姿等を見渡しやすいうようにシートを構成した。子どもの学びを見取り数時間前や数時間後の授業を見渡すことによって、授業の改善・変更がしやすくなり指導と評価を一体的に行える。

1時間ごとの評価では、少なくともB（概ね満足）の様相を示す子どもの姿を示すこととする。さらに、A（十分満足）の子どもの姿も想定することで、多様な子どもの見方・考え方を受け止め、価値付けることができるようになる。小学校において、子どもの「これはどう?」「こんなときも!」という思いを尊重し、中学校・高等学校での「さらに学びたい」という子どもの思いにも対応していく中で、子どもの力を伸ばすことに役立つと考える。

(ウ) シート活用の基本的な考え

このシートは授業者が日常的かつ継続的に活用することを期待している。シートの項目をすべて書き込むことを目的とせず、例えば、未記入のあるまま使い始め、使いながら未記入箇所に書き込んだり、すでに記入してある箇所を変更したりするように気軽に活用してもらいたい。また、作成したものを学年部や教科部の教員で共有して構想を広げたり深めたりするなど、学校全体で活用することも有効だと考える。授業者が自分の使いやすいようにシートをつくっていくことを期待している。

エ 理科

理科では、自然の事物・現象を科学的に解決するために必要な資質・能力を育むためには、子どもが主体的に問題解決（探究）する過程を経験することが大切である。そのため、単元における子どもの思考の流れを大切にする観点と負担軽減の観点から単元構想シートと各時間の展開にあたるシートをまとめてA3判1枚のシートにした。また、予想される子どもの姿や反応を想定し、それに応じてどのような展開にするか、どのような支援や助言をするかを考え、より形成的な対応ができるようにシートを作成した。さらに、理科においては単元においてどのような教材をどのように扱うかも大切なポイントであると考え、教材の特徴等をメモできる欄を設けた。

(ア) 単元における子どもの思考の流れを大切にするための工夫

子どもが自ら問題を見だし、予想や仮説を発想し、それに基づいて解決方法を発想し、多様な結果を基により妥当な考えをつくりだしていく問題解決(探究)の中での子どもの思考の流れが一目で見えるようにすることが大切であると考えた。そのために、単元の流れと、各時間の展開をコンパクトにまとめるようにした。そのことで単元の全体を俯瞰することができるとともに、毎時間のシートを作る時間を削減できると考えた。

(イ) 予想される子どもの姿や反応から展開や支援・助言を考える

第1案として作成した単元構想シートでは、評価基準を設定し、それぞれにどのような価値付けをしたり、支援をしたりするかを記述するように設定していた。教師が形成的な評価及び指導をするためには、子どもがどのように思考するのかを想定し、学級やグループの中でどのように考えを伝えあうか、また子どもの思考に対して、教師がどのような支援をするかを考えることが重要であると考えた。しかし、単元構想シートを活用した実践者は、単元の構想段階で予想される子どもの反応を予想以上に詳細に書き込んでいた。作成において、大きな負担がかかったと想像される。負担にならない程度に要点を絞って記載できるように、記入例で示すなど配慮したい。

各時間においては、その時間の学習活動を構想するとともに、その学習で想定される子どもの姿や反応を考えて記載したい。学習活動において子どもたちは、教師が期待する反応をするとは限らない。教師が期待しない反応も想定することで、その反応に対してどのように価値付けたり、支援や助言をしたりするかが検討できる。また、子どもから多様な考えが出るように構想することで、子どもたちが相互に多面的・多角的に検討する学習場面を創出することができると考えられる。そのような学習をめざす単元構想でありたい。

(ウ) 理科における教材の意義を明確にする必要感

教材について特徴、日常とのつながり、面白さや難しさを記述できる欄を設定した。理科では、子どもに何とどのように出合わせるかによって、子どもの反応や学習活動も変わってくる。子どもにどのような教材と出合わせることでどのような展開になるのかということも想定して単元を構想する必要があると考える。そのために教材の特徴等を記述できる欄も設けた。

オ 外国語科

外国語科における単元構成では、学習指導要領に示される「資質・能力の育成」を踏まえ、言語活動を中核に据えた授業設計が求められる。特に、各単元が CAN-DO リストの達成にどのように結びついているかを明確にしたうえで単元ゴールを設定すること、単元ゴールから逆算して指導内容を構成すること、評価をパフォーマンスに基づいて行うことが重要であると考えた。

(ア) CAN-DO リストの活用

島根県では令和5年度に県内全中学校、令和6年度に県内全小学校において CAN-DO リストの作成が求められた。CAN-DO リストは、「英語を使って何が

できるようになるか」を示したものであり、学年ごとに、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「読むこと」の領域別に作成される。

単元構想シートを作成するにあたって、各学校で作成された CAN-DO リストを基に単元の目標を設定すること、各単元が学年全体での学びの中でどのような位置付けにあるのかを意識することが重要であると考えた。そのため、本研究で作成した単元構想シートでは、学年末到達目標（CAN-DO リスト）を位置付けた。

（イ） 言語活動を通した指導

現行の学習指導要領における外国語教育では、知識や技能の習得にとどまらず、それらを実際に活用する言語活動の充実が重視されている。そのため、目的・場面・状況を明確に設定した言語活動を構想することが重要であり、これらを工夫することで子どもが主体的に英語を用いたコミュニケーション活動に取り組むことができる。

このことを踏まえ、単元構想シートでは、目的・場面・状況を意識した言語活動を設定する欄を設けるとともに、到達したいゴールから逆向きに指導内容や学習過程を構成できるようにした。

（ウ） 指導と評価の一体化

単元を構想する際には、子どもが単元ゴールをどの程度達成しているかを確認するため、どのようなパフォーマンス課題を設定するかをあらかじめ想定しておくことが重要である。最終的に子どもに期待される姿を具体的に描きながら毎時間の指導を構想することによって、指導と評価の一体化が図られ、授業の質の向上につながる。

また、その過程においては、毎時間の子どもの様子を丁寧に見取ることが欠かせない。発話ややり取りの内容、理解の状況などを継続的に把握することで、個に応じた指導や指導の工夫が可能となり、学びの深まりにつながる。

本研究における単元構想シートでは、単元の指導に入る前に作成するシートと、毎時間の指導のメモとして活用するシートの2種類を用意した。特に、毎時間の指導のメモとして活用するシートは、少なくともB相当の子どもの姿を言語化した上で授業に臨むことを意識させる設計とした。これにより、指導の改善や指導の質の向上につながり、言語活動を通した指導の充実が図られることが期待される。

（2）アンケートについて

① 調査のねらい

本調査は、単元構想シートの汎用性を高め、かつ授業者の負担を軽減しつつ、効果的なツールへと磨き上げるための材料を得ることをねらいとした。シートが授業者の単元構想をどう支え、どう授業改善につながったのか、その変容や課題を明らかにし、シートを改善していくためにアンケート調査を実施した。

② 調査の内容と方法

調査対象は、「授業者」と、「管理職（授業参観者）」とし、実施時期は、1学期の実践後と、改善を加えたシートを用いた2学期の実践後の計2回とした。それぞれの視点からシートの有効性や課題を多角的に検討してもらうことをめざした。

授業者用アンケートは、「負担なく活用できたか」「授業改善にどう繋がったか」といった活用した実感に係る質問に加え、使いづらかった点や具体的な改善案、そしてシート活用によって見えてきた子どもの成長について問い、実践を通した手応えや課題を収集した。

管理職（授業参観者）用アンケートは、客観的な視点から、授業者と子どもの関わりにどのような変化が見られたかを問い、また、校内での授業づくりにおける活用の可能性（汎用性）についても意見を求め、校内への普及に向けた課題を抽出した。

実施にあたっては、回答者の負担軽減に努めた。項目数を絞り込むとともに、Googleフォームによる回答や、指導主事による対面や電話での聞き取りなど、状況に応じた柔軟な方法を選択した。これにより、多忙な現場の先生方が日々の実践の中で感じた本音を出しやすい環境づくりに努めた。

③ アンケート結果より

ア 授業実践協力者及び実践協力校からのアンケート結果の分析

（ア） アンケートの概要

本研究では、単元構想シートの有効性と改善点を把握するため、授業実践協力者および実践協力校の管理職を対象にアンケート調査を実施した。1学期に3件、2学期に5件の合計8件の回答を得た。校種・教科別では、小学校社会2件、中学校外国語2件、小学校理科2件、小学校国語1件、中学校数学1件であった。また、管理職からは7件の回答を得た。アンケートでは、単元構想シートの有効性を6つの観点から評価するとともに、使いづらかった点、改善方法、今後の活用場面、子どもの成長などについて自由記述で回答を求めた。

（イ） 単元構想シートの有効性に関する評価

単元構想シートが単元づくりをする上で役立ったかについて、6つの観点から4件法（「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」）で評価を求めたところ、以下のような回答を得た。

【単元構想シートの有効性に関する評価結果】

評価項目	そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①目標の明確化・具体化を図ることに役立った	7	1	0	0
②めざす資質・能力の意識化を図ることに役立った	4	2	2	0
③単元全体に見通しをもつことに役立った	6	1	1	0
④授業における子どもの姿を具体的に想像することに役立った	5	2	1	0
⑤単元終了後にめざす子どもの姿を具体的に考えることに役立った	5	3	0	0
⑥子どもの思考を大切に授業を行うことに役立った	6	1	1	0

全体として、「目標の明確化・具体化」「単元全体への見通し」「子どもの思考

を大切にした授業」の3点において高い評価が得られた。特に「目標の明確化・具体化」については、8件中7件が「そう思う」と回答しており、単元構想シートが授業者の目標設定を支援する上で有効であることが示された。一方、「めざす資質・能力の意識化」については2件が「あまりそう思わない」と回答があり、他の項目と比較して評価が分かれる結果となった。これは、資質・能力という抽象的な概念を具体的な子どもの姿として捉えることの難しさを示唆していると考えられる。

(ウ) 使いづらかった点と改善方法

自由記述による回答から、以下のような課題が明らかになった。

A シートの構成・分量に関する課題

小学校社会科からは「ページ数が多い」「単元全体を把握するものがあると使いやすい」との指摘があった。また、小学校理科からは「単元構想シートから授業展開が分かりづらい」「1時間1時間の授業づくりへの活用が難しい」との意見が寄せられた。中学校数学科からは「1授業1シートの様式になっていると数時間前の授業のふり振り返りや数時間後の授業の計画を見渡しにくい」との指摘があった。これらの意見から、単元全体を俯瞰できる構成と、各時間の詳細な計画とのバランスをどのように取るかが課題であることが見えてきた。

B 記述内容に関する課題

小学校社会科からは「子どもCの欄は必要だが、ABの欄は自分で意識化できているので不要に思った」との意見があった。また、中学校外国語からは「ゴールに向けての授業構成を考えると枠をもっと広めに作ってもらえるとありがたい」との要望があった。さらに、小学校理科からは「単元構想シートの完成が目的になってしまった」「事前にかけていた『支援や活かし方』の手立てが子どもの実態に適さないものもあった」との反省が述べられた。これは、シートを埋めること自体が目的化し、子どもの実態に基づいた柔軟な対応が困難になる危険性を示している。

C 教科の特質に応じた改善の方向性

各教科から具体的な改善方法が提案された。小学校社会科からは「各時間に子どもが獲得する知識の枠があるとよい」との提案があり、概念的知識の獲得を重視する社会科の特質が反映されている。小学校理科からは「『学習問題、実験・観察方法、まとめ・次時とのつながり』について明記した方が授業づくりに生かされる」との具体的な提案があった。また、「『ねらいを明確にするために、授業前に考えておいた方がいいところ』と『授業が進み、子どもたちの姿を見取ることによって明確にしていくべきところ』がシートから分かれると良い」との指摘は、単元構想の活用における段階性を明示することの重要性を示唆している。小学校国語科からは「『子どもが実際に持った問い』を分類するとよい」「4つに分類してみたら、使いやすくなった」との実践に基づく改善例が報告された。中学校数学科からは「指導案に記述する単元計画が、そのまま記入用シートになっている様式の方が、授業改善の様子を見渡しやすく、記入の負担も少

なく、日常的に使うシートになる」との提案があり、日常的な活用を可能にする簡便性の必要性が指摘された。

(エ) 今後の活用場面

授業実践協力者からは、単元構想シートの今後の活用について前向きな意見が多く寄せられた。小学校社会科からは『知識と問いの構造図』と併用して使いたい。もしくは『知識と問いの構造図』の代わりに使いたい」との意見があり、既存の授業づくりツールとの関連性が示された。中学校外国語科からは「各単元で単元構想を一枚の紙に集約できると複数名で同学年をもつときにイメージを共有しやすい」との指摘があり、教員間の協働における有効性が認識されている。小学校理科からは、1回目の実践時には「単元に入る前の授業づくりに活用したい」と回答していたが、2回目の実践を経て「日々の授業づくりにも活用したいと思った」と意識が変化したことが報告された。この変化は、単元構想シートの活用を通じて、「教師の『～したい』『～させたい』ではなく、子どもの思いを大切にしながら、目標に立ち戻ることができる」という効果を実感したことによるものであると考えられる。中学校数学科からは「負担なく日常的に使えるものになれば、多くの単元で使って、日々の授業改善に役立てたい」との条件付きながらも、継続的な活用への期待が示された。また、中学校外国語科からは「日常的に用いる端末でも使えるアプリケーションになるとありがたい」との要望があり、ICT環境の変化に対応したツールの在り方も課題として浮上した。

(オ) 子どもの成長に関する実感

授業実践を通じて、子どもの具体的な成長を実感したという報告が多く寄せられた。小学校国語科からは「表現の工夫や情景描写に目を向ける子どもが増えた」という変化が報告された。中学校外国語科からは『できた』を実感した子どもを確認しやすくなった』『～の使い方が分かった』ではなく、『学校の様子について進行形を使ってレポートすることができた』というように具体的な場面をあげて、できたことを表現するようになった」との報告があり、目的・場面・状況を考えた単元計画が子どもの学びの目的意識に変化を与えたことが示された。小学校社会科からは「問いを見直す意識が高まった」との成果が報告された。小学校理科からは特に詳細な報告があり、「授業で学んだことや経験したことを関係付けながら、問題を解決しようとする姿勢が見られた」「ペットボトルロケット作りでは、学んだことをもとに子どもたち同士で話し合いながら試行錯誤していた」という主体的な学びの姿が観察された。また、「イメージ図を『書かせている』という感じから『活かしている』という感じに変化した」という質的な変化も報告され、子どもたちが自ら学びの手段を選択・活用するようになったことが示された。さらに、「(予想を立てる⇒実験方法を考える⇒考えた実験を行う⇒実験結果をまとめる⇒実験結果を考察する⇒新たな問題を見だし、次の問題解決へ向かう)」といった問題解決の過程を踏まえながら、

主体的に追究する姿に成長を感じた」「言葉だけでなく、図でも表現することも大切にしていたが、教師が指示をしなくても、自分の考えを伝える手段の一つとして絵やイメージ図を使いながら、自分の考えを伝えることができるようになった」との報告があり、問題解決能力と表現力の両面での成長が確認された。一方、中学校数学科からは「今のところは、感じられていない」との率直な回答もあり、教科や単元の特質、実践の段階によって効果の表れ方に差があることも明らかになった。

(カ) 管理職からの評価

管理職 7 件の回答からは、単元構想シートの校内活用に対する期待と課題が明らかになった。

A 高い評価と期待

「とても役立つと思う」との回答が 3 件、「少し役立つと思う」が 3 件であり、概ね肯定的な評価が得られた。小学校社会科の管理職からは、「従来の学習指導案を作成するよりはるかに短い時間で作成できる」「単元や授業における教師の意図を明確にしてシートに明示できる」「『子どもがもつであろう問い』だけでなく『子どもがもった新たな問い』の欄がとてもよい」との高い評価が寄せられた。また、「『支援』という言葉が具体的にイメージしやすいように、『問い返し』『確認』『全体に広げる』など授業にすぐに生かせる言葉もよいのではないか」との具体的な改善提案もあった。小学校国語科の管理職からは「子どもの実態把握に役立つと共に、指導者が指導事項を意識化でき、計画的な単元指導ができるから」との評価があり、シートが教師の意識化を促す効果が認識されている。

B 活用対象と継続性に関する示唆

中学校外国語科の管理職からは重要な指摘があった。「教科の目標、単元の目標、子どもの実態、教師の願い、単元構成、1 時間ごとのねらい、予想される子ども（しかも、A B C に分けて）の反応と支援、成果と課題の記録という流れは大変分かりやすく、授業づくりの基本を押さえるには適切なツールであると思う。一方で、これが必要なのは 6 年目までくらいではないかな、とも思う。教職 2・3 年目あたりでこのシートを使ってしっかりと指導案作りについて学べば、自然と頭の中で構想できるようになるのではないかな」との意見である。この指摘は、単元構想シートが特に若手教員の授業力向上に有効である一方、中堅以降の教員にとっては「枠があれば埋めるための労力が必要であり、それなりの時間がかかる」という負担面も考慮する必要性を示唆している。同時に、「若いころにこのようなシートを使って授業を作る経験を積んでいけば（もっと授業が上手になっただろうに）」との感想も述べられており、授業づくりの基本を学ぶツールとしての価値は高く評価されている。

C 校内研究との関連

小学校理科の管理職からは「単元全体を俯瞰して見やすくなり、授業のイメージをもちやすくなる」「指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考

資料に示される『内容のまとまりごとの評価規準』作成にも活用できる」との評価がある一方、「よりよい単元構想シートにしていくためには、今後の改善等が必要になる」「すべての子どもが本時の目標を達成できるようにするためにもきめ細かな手立てを考えることは効果があると思うが、授業者だけの力で作りあげるのは大きな負担がかかると思うので、校内研究として作りあげる必要はある」との指摘があった。この意見は、単元構想シートを個人のツールとしてだけでなく、校内研究における協働的な授業改善のツールとして位置付けることの重要性を示している。

D 周知における工夫の必要性

小学校社会科の管理職からは「社会科の研究協議で、『学習問題』『問い』『単元を貫く問い』『めあて』などの言葉が飛び交うと難しいので、何か解説があるとさらに助かる」「シートの記入例があると書きやすいと思う」「ぜひこのシートも EIOS に掲載してほしい」との要望があり、シートの普及にあたっては用語の解説や記入例の提供が必要であることが示された。

(キ) アンケート結果から得られた示唆

以上のアンケート結果から、以下の3点が明らかになった。第一に、単元構想シートは「目標の明確化・具体化」「単元全体への見通し」「子どもの思考を大切にした授業」を実現する上で有効であり、特に若手教員の授業力向上に資するツールとして期待できることである。第二に、教科の特質に応じたシートの構成や記述内容の工夫が必要であり、特に単元全体を俯瞰する視点と各時間の詳細な計画のバランス、シートの完成を目的化せず子どもの実態に応じて柔軟に活用できる構造が求められることである。第三に、単元構想シートは個人のツールとしてだけでなく、校内研究における協働的な授業改善のツールとして活用することで、より大きな効果が期待できることである。これらの示唆を踏まえ、2回目の授業実践に向けた単元構想シートの改善を行った。

イ 単元構想シートの改善と最終版の作成

(ア) 1回目の実践を受けた改善の視点

1回目の授業実践とアンケート結果を受け、各教科ワーキンググループでは以下の視点から単元構想シートの改善を図った。

A 単元全体の俯瞰性と各時間の具体性の両立

多くの教科から「単元全体を把握しやすくする」「各時間の授業展開を見渡しやすくする」という要望が寄せられたことを受け、単元全体を一覧できる構成を維持しつつ、各時間の学習活動や子どもの姿が具体的にイメージできるような記述欄の配置を工夫した。

B 記述の焦点化と負担軽減

「シートの完成が目的になってしまう」という指摘を重く受け止め、記述すべき内容を精選し、授業者が本当に考えておくべきポイントに焦点化した。特に、すべての欄を埋めることを前提とせず、授業者の必要感に応じて柔軟に活用できることを明示した。

C 教科の特質を反映した項目の設定

各教科から提案された改善方法を踏まえ、教科の特質に応じた項目を設定した。例えば、社会科では「獲得する知識」の欄を設け、理科では「学習問題」「実験・観察方法」「まとめ」を明示する構成とし、外国語科では「CAN-DO リスト」との関連化を図るなど、教科固有の特質を大いに生かした。

D 子どもの実態に応じた柔軟な対応の促進

「事前に行っていた手立てが子どもの実態に適さないものもあった」という反省を踏まえ、単元構想シートは授業前に完成させるものではなく、授業を進めながら子どもの実態に応じて修正・加筆していくものであることを明確にした。

(イ) 2 回目の実践を受けた最終的な改善

2 回目の授業実践とアンケート結果を受け、さらに以下の改善を行った。

A 「見取り」の重視

本研究の中心的な視点である「一人一人の適切な見取り」をより明確にするため、予想される子どもの姿を記述する欄を充実させるとともに、その見取りに基づく支援や価値付けを考える構成とした。

B 活用の段階性の明示

小学校理科からの提案を受け、「授業前に考えておくべきこと」と「授業を進めながら記述していくこと」を区別できるような構成や記入例の提示を工夫した。これにより、シートの完成を目的化せず、子どもの実態に応じた柔軟な対応を促すことができると考えた。

C 用語の整理と記入例の充実

管理職からの要望を受け、各教科で使用される用語（「学習問題」「問い」「めあて」など）の関係性を解説する資料を作成するとともに、具体的な記入例を示すことで、シートを初めて活用する教員でも理解しやすいように配慮した。

D ICT 環境への対応

日常的に使う端末でも活用できるよう、Excel 形式でのデータ提供を基本とし、各学校の環境に応じて編集・活用できるようにした。

(ウ) 最終版「子どもの思考過程を大切にするための単元構想シート」の特徴

以上の改善を経て完成した最終版の単元構想シートは、「子どもの思考過程を大切にするための単元構想シート」と名付けた。このシートは以下の特徴を持つ。

A 子どもの見取りを中心に据えた構成

シートの中核に「予想される子どもの姿や反応」を位置付け、そこから「支援や価値付け」を考える構成とした。これにより、教師の一方的な指導計画ではなく、子どもの思考過程に寄り添った単元構想を促すことができる。

B 教科の特質に応じた柔軟性

5 教科それぞれの特徴を反映しつつ、共通する視点として「目標の明確化」「めざす子どもの姿の具体化」「単元全体の見通し」「子どもの見取りと支援」

を位置付けた。各教科のシートは、教科固有の学習過程や重視すべき視点を反映した構成となっている。

C 日常的な活用を可能にする簡便性

記述内容を精選し、授業者の負担を軽減することで、日常的に活用できるシートとした。すべての欄を埋めることを前提とせず、授業者の必要感や子どもの実態に応じて柔軟に活用できることを明示した。

D 協働的な授業改善を支えるツール

個人のツールとしてだけでなく、校内研究や教科部会等で活用することで、教員間の協働的な授業改善を促進するツールとして位置付けた。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

本研究を通じて、以下の3点の成果が得られた。

① 子どもの見取りを中心に据えた単元構想シートの在り方の明確化

3年間の研究を通じて、指導と評価の一体化を図るためには、教師による適切な子どもの見取りが中心となることを改めて確認した。単元構想シートでは、「予想される子どもの姿や反応」を具体的に想定し、それに基づいた支援や価値付けを考える構成とすることで、子どもの思考過程に寄り添った授業づくりを促すことができた。授業実践協力者からのアンケートでは、「目標の明確化・具体化」「単元全体への見通し」「子どもの思考を大切にした授業」において高い評価が得られ、実際に子どもの具体的な成長を実感したという報告も多く寄せられた。これらの結果は、本研究がめざした単元構想の在り方が一定の有効性を持つことを示している。

② 教科の特質に応じた単元構想シートの開発

国語科、算数・数学科、理科、社会科、外国語科の5教科において、それぞれの教科の特質を反映した単元構想シートを開発することができた。各教科のシートは、共通する視点として「目標の明確化・具体化」「めざす子どもの姿の具体化」「単元全体の見通し」「子どもの見取りと支援」を持ちながらも、教科固有の学習過程や重視すべき視点を反映した構成となっている。例えば、社会科では「獲得する概念的知識」と「問いの構造」を重視し、理科では「問題解決の過程」と「教材の特質」を重視するなど、教科の特質が明確に表れている。授業実践協力者からも、教科の特質に応じた改善提案が多く寄せられ、それらを反映することで、より実践的なシートへと改善することができた。

③ 授業者の必要感に応じた柔軟な活用を可能にする設計

当初は詳細な記述を求めるシートを想定していたが、授業実践を通じて「シートの完成が目的になってしまう」という課題が明らかになった。この課題を受け、記述内容を精選し、授業者の必要感や子どもの実態に応じて柔軟に活用できる構成へと改善した。最終版のシートでは、すべての欄を埋めることを前提とせず、単元構想の段階や授業者の経験に応じて活用できることを明示した。また、「授業前に考えておくべきこと」と「授業を進めながら記述していくこと」の区別を意識できる構成とすることで、子どもの実態に応じた柔軟な対応を促すことができた。管理職からのアンケートでは、「従来の学習

指導案を作成するよりはるかに短い時間で作成できる」「授業づくりの基本を押さえるには適切なツール」との評価が得られ、特に若手教員の授業力向上に資するツールとして期待できることが示された。

(2) 課題

本研究を通じて、以下の3点の課題も明らかになった。

① 長期的な活用による効果の検証

本研究では、各授業実践協力者に1学期と2学期の2回の実践をしていただいたが、単元構想シートの長期的な活用による効果については十分に検証できていない。アンケートでは、「日常的に活用したい」という前向きな意見が寄せられた一方、「負担なく日常的に使えるものになれば」という条件付きの意見もあった。また、管理職からは「6年目までくらいには必要だが、それ以降は頭の中でできる」との指摘もあり、経験年数や授業力の段階に応じた活用の在り方については、さらなる検討が必要である。今後、県内の学校で継続的に活用される中で、長期的な効果や課題を把握し、必要に応じてシートの改善を図っていくことが求められる。

② 校内研究における活用方法の具体化

管理職からのアンケートでは、「校内研究として作りあげる必要がある」との指摘があり、単元構想シートを校内研究や教科部会等で協働的に活用することの重要性が示唆された。しかし、本研究では個人での活用を中心に検討を進めたため、校内研究における具体的な活用方法については十分に提案できていない。単元構想シートを用いた協働的な授業研究の在り方、若手教員への指導・助言の在り方など、組織的な活用方法について今後検討していく必要がある。

③ ICT環境の変化への対応

アンケートでは「日常的に用いる端末でも使えるアプリケーションになるとありがたい」との要望があり、ICT環境の変化に対応したツールの在り方も課題として浮上した。本研究では、Excel形式でのデータ提供を基本としたが、今後はクラウド環境での共同編集や、タブレット端末での活用など、多様な活用形態に対応できるよう、提供形式や活用方法について検討していく必要がある。

6 おわりに

本研究は、子ども一人一人の資質・能力を育むため、指導と評価の一体化を図った単元構想の在り方を整理し、授業者が単元を構想する際の指針を提案することを目的として、3年間にわたり取り組んできた。3年次は、前年度までの成果と課題を踏まえ、5教科における単元構想シートの在り方を検討した。授業実践協力校からの所感をもとに、教科の特質に応じて単元構想で重視すべき視点を焦点化し、内容の改善を繰り返した。その結果、教師による適切な子どもの見取りを中心に据えた単元構想シート「子どもの思考過程を大切にするための単元構想シート」を完成させることができた。このシートは、「目標の明確化・具体化」「単元全体への見通し」「子どもの思考を大切に授業」を実現する上で有効であり、特に若手教員の授業力向上に資するツールとして期待できる。今後、県内すべての小・中義務教育学校、高等学校及び特別支援学校へ周知した単元構想シートが、各学校の実態や授業者の必要感に応じて効

果的に活用され、島根の子どもたちの資質・能力の育成に寄与することを期待している。最後に、本研究にご協力いただいた授業実践協力者及び実践協力校の皆様に心より感謝したい。

【「子どもの思考過程を大切にするための単元構想シート」掲載先】

○島根県教育センターホームページ⇒「調査・研究」⇒「研究成果物」⇒「企画・研修スタッフ」

○研修情報システムMyPage⇒「教職員の学びサポート」 ※島根県内に勤務する教職員に限る
また、以下のURLまたは二次元コードからも取得できます。

<https://x.gd/BCB7K>



【参考文献】

- ・石井英真（2023） 中学校・高等学校授業が変わる学習評価深化論 図書文化社
- ・国立教育政策研究所（2019） 平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査結果概況 島根県
<https://www.nier.go.jp/19chousakekkahoukoku/factsheet/19prefecture-City/>
(参照 2026-01-27)
- ・国立教育政策研究所（2024） 令和 6 年度全国学力・学習状況調査結果概況 島根県
<https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/factsheet/prefecture-City.ht>
(参照 2026-01-27)
- ・澤井陽介（2022） できる評価・続けられる評価 東洋館出版
- ・国立教育政策研究所（2020） 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校編）
- ・国立教育政策研究所（2020） 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校編）
- ・国立教育政策研究所（2021） 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）
- ・島根県委員会（2023） R5 全国学力調査結果概要
- ・田村学（2018） 深い学び 東洋館出版
- ・田村学（2021） 学習評価 東洋館出版
- ・広島県教育委員会 ホットライン教育広島 単元構想シート（例）
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku12/>（参照 2026-01-27）
- ・文部科学省（2017） 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）
- ・文部科学省（2017） 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）
- ・文部科学省（2018） 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）

